

二十六 尾崎紅葉の死は、鹽原の場景の新聞に掲載されたる明治三十二年より、四年の後なりき。『金色夜叉』の文章に縷骨の苦心を重ねつつ、胃潰瘍より胃癌の闘病生活を續けたる紅葉、三十五才を一期として世を去れり。

二十七 紅葉は正岡子規と共に、俳句の世界にありても、一方の雄なり。其の辭世の句に、「死なば秋露の干ぬ間ぞ面白き」と言へり。「露の干ぬ間」とは「自らの生きてある間」の意なり。自らの生きてある間は面白く世を過ごせど、そは、秋の露の干ぬ間なりしに過ぎずと自嘲す。臨終の牀に集ひたる見舞ひ客が愁ひ顔を見、「どいつもまづい面だ」と呟きしとぞ。これ、紅葉が最後の言葉となれり。辭世の句に自らを茶化し、最後の言葉に客さへ茶化す。まこと紅葉は、最後に至るまで、洒脱なる江戸つ子氣質を失はず。

二十八 紅葉の生前に作りし小唄、今も花街に唄はる。

止めてもかへる なだめても

かへる、かへるの 三ひよ(ひよ)

とんだ不首尾の 裏田圃

ふられついで の ええ 夜の雨

となむ。「歸る」と「蛙」、「振られ」と「降られ」の掛詞、「蛙」と「跳んだ」の

縁語を用ゐ、吉原の遊女が、若き愛人の、引止むるを聞かで歸り行きたる後の、むしやくしやせる氣分を唄ふ。

二十九 甘黨なりし紅葉の馴染みたる菓子舗に、芝神明榮太樓あり。此處に紅葉の名付けたる「江の嶋」最中ありて、今も人氣の銘菓なり。紅葉、後の時代の作家等と異なり、斯く、世間に多様な接點を有せり。

三十 紅葉の弟子なれど、自然主義派指導者として、師に弓を引くこともありし田山花袋、紅葉を、「江戸生れの男らしい男」、「人を率ゐるの權威と才能を」持ちたる男なりと評し、紅葉の若き死を、「此の上なき文壇の恨事」と慨嘆す。花袋が回想によれば、紅葉、「師を去る三尺その影を踏まずと言ふやうな干渉的な教育を：強ひたにも拘らず、門弟達は從順にその鞭と教へを受けて居た。その：家塾には、昔の師弟のやうな純な關係を見ることが出來た」となむ。事實紅葉門下の弟子等、擧げて文壇に進出せり。

三十一 泉鏡花晩年の小説に、紅葉門下の若き弟子等が生態を描きたる「薄紅梅」あり。麴町九段なる硯友社編輯所に、文士志望者等集ひ來たる。弟子等が上に、壓倒的權威と存在感もて立つは、親分紅葉なり。弟子等一人一人に、渾名をつけ揶揄するも、面倒見よく、徹底的に弟子等の面倒を見る。金の相談、女の相談、結婚の世話等なり。弟子に對する叱責厳しきも、そがいつか巧みなる比喻と地口に換り、皆笑ひ出づ。鏡花が見たる紅葉は、「春照と秋霜」、春の輝きと秋の霜、厳しき義氣と「玉の如き」温情の師なりき。

三十二 明治期の日本の近代小説の歴史を見るに、次の事に氣附かむ。小説の主流の、文語小説より言文一致體小説に切替りたるは、西曆十九世紀と二十世紀の境目、明治三十三年頃なり。その前後に、文學の先走者の内、江戸の氣風を濃厚に受繼ぐ樋口一葉、尾崎紅葉、及び齋藤綠雨、二十代、三十代の若さにて相次ぎ没す。その後は自然主義派の盛期となるも、短き間に飽かれ、長く文壇の本流を占めたるは、森鷗外、夏目漱石、永井荷風の、歐米よりの歸朝者なり。歐米留學者ならずして、日本人の感性に根差せる作風の幸田露伴、泉鏡花ありて、文壇に重んぜらるるも、近代文學にては少數派に甘んず。

三十三 そが、日本近代文學の性格を偏向せしめたるなきや。固より鷗外、漱石、荷風、三人何れも、日本文化の素養深し。年齢と共にそれぞれの流儀にて、日本本來の文化傳統に回歸せり。されど三人は、皆、歐米文學を文學の模範とせる時期あり。三人が文學に、歐米の影響濃し。漱石と荷風、明治日本を批判し、それに對し斜に構へる姿勢強し。井原西鶴に學び、義理人情を尊びたる紅葉とは、思想を異にす。

三十四 埒も無き假定なれど、若し紅葉、一葉等の實際より長生きせば、日本の近代文學、如何なるものとなりしや。實際より廣く、社會に受入れられたるに非ずや。或いは後の日本文學の特徴たる純文學、大衆小説の辨別、生ぜざりしやも知れず。現に紅葉の弟子等、純文學、大衆小説兩分野に進めり。又文章を考ふるに、言文一致の現代文に、日本人にとり、今より自然なる文章と、江戸期に連續せる文體、成立し得たるやも量り得ず。

三十五 斯かるは、思ふも益無し。されど尾崎紅葉、特に『金色夜叉』に、正宗白鳥の言ふ如き骨格の大きさあれば、斯かる事を考ふるを得さしむるなり。

三十六 尾崎紅葉が死の年に、弟子泉鏡花との間に、一事件あり。紅葉、泉鏡花の神樂坂藝者桃太郎と同棲せるを知りて怒り、鏡花を叱りて離別せしむ。何故に紅葉の怒れるやは知れず。されど鏡花、素直に師の言に従ふ。こは、後に鏡花が小説『婦系圖』の、芝居となりて上演せらるるに、湯島天神の早瀬主税・お蔦の別れの場、多くの人を感動せしむ。「湯島の白梅」なる演歌、それを唄ひて、長く世に唄はる（「湯島の白梅」聴くべし）。

三十七 實際に泉鏡花、紅葉が死後此の女性と同棲し、長き逡巡の後結婚す。一生を添ひ遂げたるすず夫人なり。内助の功ありし賢夫人にして、鏡花がものの好悪、性癖を知り盡し、日常生活の中に、鏡花の文學活動に適したる環境を調（と）ふ。鏡花は金澤生れにて、父は彫金師なれど、幼時死別せる母、名、鈴は、江戸の能樂の鼓の名門出身なり。この母を生涯慕ひたる鏡花には、江戸生れの同名の夫人、母と同じく、江戸の文化を體現せる女性なりけ

む。後年の鏡花の小説、隨筆のここかしこに、夫人と鏡花自身の、仲睦まじく、互かたみに巧みな  
る冗談を交はすあり。

三十八 泉鏡花は尾崎紅葉の六歳年下なり。紅葉の『一人比丘尼色懺悔』を讀みて感激し、  
十七才にて上京、紅葉が内弟子となれり。紅葉家に書生兼玄關番とて住込み、紅葉より、  
一々の文章の添削等、親身なる指導を受く。

三十九 紅葉が幹旋にて、二十才前に、京都の日刊新聞に小説を連載せり。此の鏡花處女作、  
評判は芳しからず、何度か連載中止の話ありしも、紅葉、新聞社を説得し、完結せしむ。し  
かのみならず、紅葉此の小説を、鏡花が郷里の新聞に轉載せしめたるらし。鏡花の一時金澤  
にありし時、新聞を買ふ金無きにより、毎日、新聞社社屋に行き、社屋の前に張り出された  
る新聞に、自らの小説の掲載せられたるを見、嬉しく思ひたるとかや。

四十 父の死によりて、鏡花、東京より金澤に歸郷す。歸郷後も引續き、草稿、手紙を紅葉に  
送りて指導を受く。されど鏡花、家族扶養等に因り、經濟的、精神的に追詰めらる。一時は、  
城の堀に身を投ぐるまでを思ふ。

四十一 ある晩鏡花、堀の周圍をさまよひ歩きしに、同じく堀に見入る若き女性あるに氣附  
けり。そが生への執著を呼戻したるにや、鏡花家に歸る。翌朝其の女性と覺しき近所の娘、堀  
に身を投げ、死せるを知る。ハンカチ工場に働く、武家出身の女工にして、刺繡の上手なり。  
鏡花、生涯、其の女性の我が身替りとなりて、我を救へりと思ひ續く。鏡花の最晩年、死の直  
前に書かれたる小説に、「縷紅新草」あり。そは其の女性の死と、親戚の、撥刺たる若き主婦  
を題材に採り、人死なば、新しき人出づる人の世の流轉の哀れを、しみじみと感ぜしむる名  
作なり。

四十二 紅葉、自らの手元に届きたる草稿と手紙より、鏡花が苦境と煩悶を察知す。直ちに書簡を送り、鏡花が氣の弱さをたしなむ。「破壁斷軒の下に生を享けて、パンを咬み水を飲む身も天ならずや。其天を樂め」、あばら家に住み、飲食に事缺くも天の與へたる運命ならずや、其の運命を樂しめ、と。又弟子が天性の素質を、「汝の腦は金剛石なり。金剛石は天下の至寶なり」と褒め、研鑽を積まば、何れ素質の花開く日來るべし、「汝を磨……くこと數年にして、光明千萬丈赫々として不滅を照らさむ」と激勵し、幾許かの金額の爲替を同封す。

四十三 この師の書簡に因りて、鏡花は救はる。後年になりて、自宅を訪問せる若き弟子、水上瀧太郎に、鏡花、手箱に大切に藏せる此の書簡を取出し、眼に涙をため、押し戴きて之を示す。水上瀧太郎は企業經營者にして作家、筆名を鏡花が作品の作中人物より藉る。

四十四 鏡花にとり、紅葉は大恩人にして、絶對の師なり。或る時相弟子の徳田秋聲、紅葉は菓子の食過ぎに因り命を縮めたりと言ひしに、鏡花、無禮なりとて、取つ組み合ひの喧嘩を仕掛く。芝居の稽古に舞臺に上りても、舞臺上に紙の紅葉の散るを見るや、師が名を憚り、踏まざるやう、それを避けて歩きたりと云ふ。されば『婦系圖』の如く、紅葉の同棲に反對せば、鏡花は、戀女房をも離別す。古風なる師弟關係の生きてあるなり。

四十五 鏡花が素質の花開く日、早く來れり。出世作、『夜行巡查』と『外科室』の發表せられしは、金澤にて、紅葉が書簡に救はれたる翌年のことなり。恐らくは此の二作品に、紅葉が添削の手、加はりたりけむ。されど紅葉は凡庸の師に非ず。添削しつつも、相手が素質、性向を知り、本人に適したる文體を模索せるならむ。其が爲なりや、此の二篇、紅葉が文章に異なる清新、個性的なる文體と、「觀念小説」と稱せらるる獨特の筋立てにて世人の耳目を惹けり。鏡花は一躍、新進作家中の白眉と目せらる。

四十六 其の鏡花出世作の一つ、『外科室』全篇、熊澤南水女史の朗讀を聽かむ。歌舞伎の坂東玉三郎丈、この小説を、吉永小百合主演にて映畫化せるは、ご存じの方あるべし。名流夫人

と醫學士が至上の戀と死を描き、「觀念小説」と言はるるまでに突き詰めたる、いかにも鏡花らしき一篇なり。(熊澤南水女史の『外科室』朗讀)

四十七 『外科室』は文語文小説なれど、其の後鏡花、独自の言文一致文體を創出す。されど時流に従はず、世を風靡せる自然主義とは一線を劃せり。『照葉狂言』、『高野聖』、『歌行燈』、『春晝』等、數多くの傑作を書き、明治後期より大正期に掛け、天才作家と持て囃さる。これらの作品に、今も時にテレビやラジオに取上げられ、さては演劇作品とて、劇場に上演せらるる多し。

四十八 歌舞伎と新派の芝居に、鏡花は、定番として上演せらるる作家なり。今も古びず。新派の『婦系圖』、『瀧の白絲』、『日本橋』、歌舞伎の『天守物語』、『海神別荘』等、今も觀客に感動を與へ續く。歌舞伎にありて鏡花は、明治以後の作家中、上演頻度の最も多き作家數人に數ふ。而も鏡花の『天守物語』等、高年齢層と云はんより、近年の若き觀客より、壓倒的的支持を受く。

四十九 鏡花、歐米歸朝組の森鷗外、夏目漱石よりも一目を置かれ、永井荷風、谷崎潤一郎、川端康成等に強き影響を及ぼす。大正より昭和になりても、作品を發表せる現役作家にして、若き作家らとの交流續けり。

五十 鏡花の文學、二つの事に讀者の眼を拓く。一つは靈の世界の氣配なり。靈の世界は、我等が日常的現實世界の裏側に、寄添ふ如く、或いは脅かす如くに存在す。時に日常世界の裂け、そこに忽然と、靈の世界、非日常の異界、露はなる姿を現す。鏡花が所謂幽靈小説、斯かるものならずや。今一つは女性原理の力なり。現實世界と靈の世界が交錯し、相互に入り交じる中を、女性原理の力、貫徹し、結合す。それを鏡花に従ひて、「觀音力」と呼ぶも可ならむ。靈の世界の怖しき鬼神の力を顯はす時、觀音力に恃まずして、いかで怖しさに堪ふるを得む。

五十一 泉鏡花が、類ひ稀なる文學の掘り起したるは、日本の文化傳統の中を、地下水の如く流るる、靈の世界の知覺と女性原理の力にあらざりしか。そは何れも、古代以來の日本にありて、文化と社會の表層近くに存在し續けり。然れども近代の歐米化に因りて、合理的思考と男性原理の支配に壓倒せられ、意識の外へ放逐せられたるに非ずや。それを再發掘せる鏡花の文學、柳田國男、折口信夫が民俗學、或いは谷崎潤一郎、川端康成が女人渴仰の文學に、繋ぐものあり。

五十二 鏡花、「文章の鍊金術師」とて、文壇と社會より特別の敬意を拂はる。當初尾崎紅葉により鍊磨せられたる獨自の文章、時代と共に洗練の度を加ふ。鏡花が文章を讀む讀者、いつか日常性と論理の筋を超え、知的言語の操作とは異なる次元にて、現實世界と靈の世界、意識と無意識の境界を辿る。されど現代の讀者、文學の愛好家にとり、鏡花の文章を讀むは難し。憾むらくは、現代の我等が、國語力と日本文化の知識、鏡花の作品を細部に至るまで理解し、それが香氣と喚起力を十全に味はふに足らざることなり。

五十三 戦後の作家三島由紀夫、鏡花の文學につき、「どんなリアリズムも心理主義も」及ばざる、「數少い日本語(言靈)」表現、と評す。鏡花の如く、言靈を喚起し得る國語文を能く書く者、已に稀なりと言はんとせるらむ。鏡花亡き後、柳田國男、「泉鏡花が去つてしまつてから、もう我々には國固有のなつかしいモチーフに、時代と清新の姿を賦與することが出来なくなつたやうな感じがしてならぬ」と嘆く。されば昭和の作家にして、『李陵』の著者中島敦の、「日本人に生れ…日本語を解しながら、鏡花の作品を讀まないのは、折角の日本人たるの特權を抛棄してゐるやうなものだ」と述ぶるはうべなり。

五十四 大正期に溯らば、芥川龍之介は、鏡花の世代を越え、親交を結びたる若き友人にして、鏡花が文學より多くを學びたる作家なりき。自身文藻の大家たりし芥川、平素鏡花を尊敬し、鏡花の文に「巨靈神斧の痕」を見る。此の若き友人が、昭和二年の突然の死、而も『泉鏡花全集』の編纂に、盡瘁したる後の自死を、鏡花、如何なる痛恨の思ひもて、見送りしぞ。

五十五 最後に、芥川龍之介の死に寄せたる、泉鏡花が文語弔辭を、熊澤女史の朗讀に聽かむ。此の文、明治以後の文語文中に、燦然と輝ける名文なり。恐らくは、昭和初年に書かれたる文語文中の珠玉、最高の典例ならむ。(熊澤南水女史の「芥川龍之介氏を弔う」朗讀)

＜＜土屋追記；

芥川への弔辭をば參考に掲載すべし。青空文庫より。＞＞

(參考)

芥川龍之介氏を弔ふ

泉鏡花

玲瓏(れいろう)、明透(めいてつ)、その文(ぶん)、その質(しつ)、名玉山海(めいぎよくさんかい)を照(て)らせる君(きみ)よ。溽暑蒸濁(じよくしよじようたく)の夏(なつ)を背(そむ)きて、冷々然(れい／＼ぜん)として獨(ひとり)涼(すず)しく逝(ゆ)きたまひぬ。倏忽(たちまち)にして巨星(きよせい)天(てん)に在(あ)り。光(ひかり)を翰林(かんりん)に曳(ひ)きて永久(とこしな)に消(き)えず。然(しか)りとは雖(いへど)も、生前(せいぜん)手(て)をとりて親(した)しかりし時(とき)だに、その容(かたち)を見(み)るに飽(あ)かず、その聲(こゑ)を聞(き)くをたらずとせし、われら、君(きみ)なき今(いま)を奈何(いかん)せむ。おもひ秋深(あきふかく)、露(つゆ)は涙(なみだ)の如(ごと)し。月(つき)を見(み)て、面影(おもかげ)に代(か)ゆべくは、誰(たれ)かまた哀別離苦(あいべつりく)を言(い)ふものぞ。高(たか)き靈(れい)よ、須臾(しゅゑん)の間(あひだ)も還(かへ)れ、地(ち)に。君(きみ)にあ(あ)がるもの、愛(あい)らしく賢(かしこ)き遺兒(あじ)たちと、温優(をんゑう)貞淑(せいしゆ)をんいうていしゆくなる令夫人(れいふじん)とのみにあらざるなり。

辭(ことば)つたなきを羞(はぢつ)、謹(つしん)で微衷(びちゆう)をのぶ。

昭和二年八月